

<今回>325回目 2023年3月27(月)14時~17時 601会議室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p443、3面の史料 より

<前回>324回目(23-3-3)出席者8名

資料1) (~~23-3-3-1~~)前回のまとめ(清水)

3-3-2)もう一つの「非海彼本」(清水)(25-8-22)

A 報告 新加入の高木氏より、前回の自己紹介は、今後の継続が未定であったので、簡略に終わってしまった。

が今日は前回の雰囲気、継続参加を決めたので、少し詳しくしたい。大分出身で九州にも愛着を持っている。家庭は祖父の代からの国鉄一家で、上野丘高校を卒業後、早大を出て、旭化成で65の定年まで勤務、榛葉氏の東戸塚講座を受けて、興味を持ち、榛葉氏に文庫本を手に入れてもらって、読書もした。と丁寧な自己紹介があり、古本の入手方法など、古田先生の本の在庫、相場の値上がりなど、話題が発展した。

B 資料一2)法華義疏の証拠は「古田一家永論争」の本の表紙写真(回覧)で皆が承知しているが、三経義疏の一つの勝曼義疏にも「非海彼本」の文字があることを紹介した。10年前の古い論で申し訳ない。ついでに杉本直次郎氏の博士論文に多くの手を入れたままの大部の本の中の上宮王(聖徳太子)と阿倍仲麻呂、縁者説は年代の違いから取りがたいとした結論に対して、上宮王が安南都護の姑の語から、上宮王が多利思北弧なら縁者の説は成り立つとした試論を紹介した。上宮王は上宮法皇ではないかと榛葉氏から指摘を受けたが、清水は本には「上宮王」になっていたと思う、すでに上宮法皇の金石文は先入観から上宮王と理解されていたと思うと答えた。厳密性がない。もう一度図書館から借りだして確かめたい。

書式変更: インデント: 左: 0 mm, ぶら下げインデント: 1 字, 最初の行: -1 字

C 読書 p442 3行目、(3)から

1) (3) 欽明 2 年(541・7) 故に今、追って先世和親の好を崇め天皇詔勅の詞に敬順し、新羅の控く所の国、南加羅・啄己吞等を抜き取りて、本貫に還し属さしめ、任那に還し実たしめて、永く父兄と作りて恆に(つね)に日本に朝せむ。百濟本記の中に「安羅を以て父とす、日本府を以て本とするなり」(日本書紀)は先回紹介した。これと対照すべき史料を隋書倭国伝に見出す。「新羅、百濟皆倭を以て大国にして、珍物多しと為し並びに之を敬仰し恆に通使往来す。「恆」という同じ文字を使っている。

2) 「恆」は常、恒と文字の解説が続く。(略)。

3) 百濟と多利思北弧の王朝(倭国)とは古くから安定した通交関係にあったことがわかる。隋は 581~618 年間の王朝だから、少なくとも 6 世紀末と 7 世紀初は安定した関係にあった。百濟本記の直接引用は欽明 17 年(556)までだ。だから百濟本記の成立は、それ以降か、6 世紀後半になる。だから「恆」の内実は同じだ。

3)4) いずれの例も任那や安羅の「日本府」は九州王朝に属する。その「日本」とは、九州王朝の自称した創唱期の「日本」だ

任那地方の政治集団という実態不明の概念を持ち出した井上秀雄氏らの論は近畿日本との関連性を出そうとした苦肉の論で成り立たない。

2023年 4 月 10 日(月) 14時から17時 602会議室

4 月 24 日(月) 14時から17時 602会議室